

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：84202

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01236

研究課題名（和文）農閑期副業における手工業生産の考察 - 筥と籠生産を中心に

研究課題名（英文）A Study of Handicraft made as the side jobs in the Agricultural off seasons

研究代表者

辻川 智代 (Tsujikawa, Tomoyo)

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・特別研究員

研究者番号：70443463

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：農閑期における副業として製作されてきた手工業品は、伝統工芸品などの専業職人と異なり、文化財保護の指定や補助金等を受けられず、その民俗知識や製作技術の継承が危ぶまれている。本研究ではそのような副業として生産されてきた手工業品の製作者に聞き取り調査を行い、材料調達場所としての周辺環境や製品の製作技術、使用方法、用途、販売経路などについて記録を行った。滋賀県においては守山市木浜の筥作りと、長浜市余呉の小原籠作りに注目し、両者への聞き取り調査から材料調達から製作、販売についての民俗知識を記録することができた。今後はこれらの技術を伝承し、自然環境の変化に対応した材料調達などの課題が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

滋賀県では農閑期における副業として筥や籠、箕作りなどの手工業が行われていた。このような副業としての手工業は、専門性の高い職人と異なり、詳しい調査や記録が少ない。現在では伝承者も高齢化が進み、数少なくなっている。

今回の調査でこれらの製作者に聞き取り調査を行い、材料の採集方法や製作技法の特徴、その民具の使用法や用途、また販売ルートなどの民俗知識を記録することができた。

研究成果の概要（英文）：Unlike full-time craftsmen such as traditional handicrafts, handicrafts that have been produced as a side job during the agricultural off-season cannot be designated as cultural properties or receive subsidies. It is difficult to pass on folk knowledge and production techniques.

In this research, we interviewed producers of handicrafts that have been produced as side jobs, and recorded the surrounding environment to procure materials, techniques for products, usage methods, applications, sales channels, etc. In Shiga Prefecture, we interviewed to manufacturer which have been made fish traps in Konohama, Moriyama City, and Ohara basket made in Yogo, Nagahama City. We revealed we must inherit these technologies, and there is difficult problem to procure materials, because the natural environment has been changing.

研究分野：民俗学

キーワード：農閑期副業 籠 筥

1. 研究開始当初の背景

農閑期副業としての手工業は、無形文化財や伝統工芸品などと異なり、文化財保護の指定や補助金等を受けられず、その民俗知識や技術継承が危ぶまれている。

滋賀県では農閑期における副業として筥や籠、箕作りなどの手工業が行われていた。このような副業としての手工業は、40～50年前に地域の民俗調査などの際に聞き取り調査が行われ、多少の調査報告が行われている(滋賀県教育委員会 1979 - 1983、余呉町教育委員会編 1993)。しかし、竹細工や桶作り、木地師などの専門性の高い職人と異なり、詳しい調査や記録が少なく、1990年に刊行された『滋賀県の諸職』にも取り上げられていない。

現在では伝承者も高齢化が進み、数少なくなっている。早急にこれらの製作者や使用者に聞き取り調査を行い、材料の採集方法や製作技法の特徴、その民具の使用法や用途、また販売ルートなどの民俗知識を調査することで、民具製作を取り巻く自然環境やその技術的な特徴、歴史的な変遷などが明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

今回とりあげる農閑期の副業としての生産技術の特徴として、箕作りを例にあげて説明する。竹製の箕は竹細工職人が製作しており、さまざまな竹細工の一つとして箕を製作しているのに対して、フジ箕などその他の材料で製作される箕は農閑期の副業として生産されていることが多い(榎 2015、森本 2009)。その特徴として、箕を中心として生産しており種類が少ないこと、集落で何軒も生産者がいること、店舗はなく農閑期に売り歩くこと等があげられる。

このように、今まで諸職や伝統工芸のような民俗学的研究からとり漏れていた、農閑期副業としての手工業生産について、民具の製作者にその技術やライフストーリーの聞き取り調査を行い、その民俗知識を記録すること

によって、知識や技術の保存と今後の技術継承についての課題を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、文献調査、滋賀県内の事例、他地域での事例調査の3種類を行った。

文献調査においてはまず滋賀県内の市町村史、博物館関係図書、字史などの図書から筥、籠に関する資料収集と集成を行い、データベースを作成した。さらに関連事例として秋田県のイタヤ細工と太平箕についての文献調査も行った。

筥については、守山市木浜の筥職人の聞き取りを行い、記録した。一方で、内水面漁業にける文献調査も平行して行った。

小原籠については、製作過程の記録を行い、材料調達や販路などの聞き取り調査を行った。また、小原籠と同様にイタヤカエデを使用する秋田県の太平箕、イタヤ細工の職人に聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) 『滋賀県の副業』にみる農閑期副業

『滋賀県之副業』は大正6年(1917)に滋賀県内務部が刊行したものである。当時の社会にとって農閑期副業とはどういうものだと捉えられていたかを研究するため、内容を入力してデータベース作成を行った。ここで推奨している副業とは、主業である農業に影響しない、老人、子供、女性でもできる、多くの資本を要しない、かつ回収が早い、原料を容易に得ることができる、かつ豊富である(自家で生産できるものがよい)、販路が広く、継続の可能性がある、

将来機械工業となるものは避ける、その地方における各種の事情に適し、生産経済的に有利であり、生産品に独自の特徴を發揮する見込みがあるもの、である。

最も多いのは手工業(83件)で、その後園芸業(65件)、畜産業・蚕糸業(30件)、林

産物（20件）と続く。副業一覧のうち、現在の手工業と関係するものとして、手工業、蚕糸業、製織業、特用作物をピックアップすると128件となる。そのうち、将来の見込みがあるものが藁製品（縄、草履、筵、吹、抜き穂箒）、竹製品（籠、箕、竹箒）、木製品（数珠、臼歯、附木、下駄）、藁製品（畳表、編み笠、蚕網、葎簀）、藤細工、刺繍、紙パイプ巻、売薬包紙折、羽織紐組、足袋の下縫、パナマ帽子編、蚕糸業（繭、生糸、真綿）、製織業（ピロード、木綿縮、麻布など）である。その後に諸職や伝統工芸として取り上げられたものは、高宮のササラ（彦根市）、近江上布（愛荘町）、かごづくり（多賀町）、近江真綿（米原市）、ピロード（長浜市）、雁皮紙・組紐（大津市）、高島硯（高島市）などがある（滋賀県ほか1980、滋賀県教育委員会1990）。

今回取り上げた木籠（小原籠）は『滋賀県の副業』の中でも「需要漸減の傾向あり之は価廉ならざるに依る大に改良を要せされば見込なし」と、需要が減少傾向にあり、高価なため発展の見込みがないとされている。確かにその後伝統工芸など大きく発展することもなかったが、農閑期の副業として細々と製作されており、その製品は高島市、長浜市、米原市などに残されている。

（2）小原籠

長浜市余呉の小原地区では「小原籠」と呼ばれる籠を製作していた。小原地区は高時川ダム建設計画により水没地区に指定され、現在では全戸移転が完了して廃村となっている（余呉町教育委員会編1993）。廃村時の戸数は9件であったが、『滋賀県物産誌』（明治13年）によると、当時は18軒あり、その全戸で籠作りを行っていた。小原籠はイタヤカエデ、もしくはイロハモミジを石畳状に組んだ籠である。琵琶湖博物館にはツボカゴ（桑、茶を入れる）、マユカゴ（蚕の繭を入れる）、ナタカゴ（鉈を入れる）など7点が収蔵されている。そのうちの1点には「天保」の墨書がみられ、

近世にまでさかのぼることがわかった。

籠作りについては、ウディパル余呉において、毎年「小原かご作り教室」を開いており、受講生を募集し、技術伝承につとめている。その中の有志が集まり、今年度から「小原籠研究会きつつき」が結成され、自分たちの技術向上と後継者育成に取り組んでいる。現在の課題として、材料であるイタヤカエデの採集があげられる。本来は炭焼きに使用するイタヤカエデを定期的に切っていたため、ちょうどよいサイズの木が多かったが、現在では木を伐採しないため大木となってしまう、使用が難しくなっている。東北から取り寄せたり、木の種類を同じカエデ科のほかの材料に変更するなど、模索中である。

また、今回の調査において岐阜県の徳山村（現揖斐町）にも同様のカゴである「ネギ細工」があることがわかった（徳山村教育委員会1987）。聞き取り調査によると徳山村とは婚姻圏にあり、小原から持ち込まれたものがあるのではないかという。

イタヤを使用した籠については、秋田県の「イタヤ細工」が著名である（秋田県編1962）。今回の調査で材料の加工は同様であるが、編み方や器種にちがいがあり、小原籠とは異なる技術体系を持つことがわかった。

（3）釜

守山市木浜には釜専門業者「ウエ熊」があった。木浜が「魩の親元」といわれるように琵琶湖の魩製作の一翼を担っていたのに合わせて、ウエ熊の釜は琵琶湖中に販路を持っていたという（渡辺1981）。

ウエ熊の釜については、その製作過程の一部を再現してもらい、その過程を記録し報告している（辻川2016）。現在のウエ熊当主は会社員でもあったため、兼業漁師であり、家業の釜製作以外にもコイタツベ漁や網漁、魩漁などさまざまな漁撈活動を行っており、副業として釜製作を行っていた。本課題により、原材料としての竹や棕櫚縄の入手先や購入方法、釜の使い方や販路まで詳しい情報を得る

ことができた。

(4) まとめ

農閑期副業としての手工業について、小原籠と笠作りを中心に製作技術の記録と現在の状況を調査することができた。今後、これらの技術を伝承し、自然環境の変化に対応した材料の調達などの課題が明らかとなった。

【文献】

秋田県編 1962 『秋田県史 民俗工芸編』

榎美香 2015 「北陸地方の箕作りとその流通・販売」
『民具研究』152

滋賀県内務部 1917 『滋賀県之副業』

滋賀県・滋賀県物産振興会 1980 『滋賀の伝統工芸を支える人びと』

滋賀県教育委員会 1979 - 1983 『琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書』1 - 5

滋賀県教育委員会 1990 『滋賀県の諸職—滋賀県諸職関係民俗文化財調査報告書』

辻川智代 2016 「「ウ工熊」乗田宗法氏による笠の復元製作」『琵琶湖博物館研究報告 28号』滋賀県立琵琶湖博物館、p105-110

徳山村教育委員会 1987 『徳山の山村生産用具』

名久井文明 2019 『生活道具の民俗考古学』

森本仙介 2009 「西日本における竹箕の製作技術と分析視点 - 「竹箕」と「藤箕」をめぐって - 」
『民具研究』139

渡辺誠 1981 「漁具と漁法」『内湖と河川の漁法』(琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書 3)

余呉町教育委員会編 1993 『高時川ダム建設地域民俗文化財調査報告書』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡部 圭一 (Watanabe Keiichi) (80454081)	京都先端科学大学・人文学部・准教授 (34303)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関